

原 著

ペスタロッチーの女子教育に関する考察(1) —近代スイスの女子教育の理念とペスタロッチーの女子学校—

Die Beobachtung über die Frauenbildung in Pestalozzi(1)

— Die Idee der Frauenbildung in die moderne Schweiz und das pestalozzische Töchterinstitut —

光田 尚美

要約：ペスタロッチーにおける「母性」とは何か。「母性」を重視した教育思想は、女子学校の理念と実践にどう関わっているのか。女子を対象とした教育論はいかにして受容されたのか。本研究はかかる問題関心から、ペスタロッチーの教育思想を女子教育の観点から再考するものである。

本稿はその端緒として、近代スイスにおいて開かれていた女子に対する教育の機会に注目し、そこから導かれる教育的思考に照らして、ペスタロッチーの女子教育論を特徴づけていきたい。考察は次のような手順で進める。まず、当時すでに行われていた女子教育の機会について概観し、その特徴を明らかにする。ペスタロッチー自身がプロテスタントであることやスイス啓蒙主義の流れに位置することから、彼の女子教育論にもこうした機会を保障していた当時の教育的思考の影響が少なからず指摘される。次に、女性の社会的意義に注目した彼独自の理解や女子学校設立の意図や教育目的について考察し、女子学校の教育理念や実践指針を明らかにする。さらに、カストホーファーとの出会いや女子教育についての彼女の見解にも言及する。これらの考察から、ペスタロッチーの女子教育論は、「人間陶冶が第一義であること」、「社会貢献として意義づけられた母親への準備教育であること」、「本来の意味においてメトードを完成させること」として特徴づけられる。最後に、本稿の結びにかえて、ペスタロッチーの女子教育論および女子学校での実践の意義を総括的に評価し、さらに考察を進めていく上での具体的な課題を示す。

Key Words：近代スイスの女子教育，イヴェルドン女子学校，カストホーファー，メトード

1. 問題の所在

ペスタロッチー (Pestalozzi, Johann Heinrich, 1746～1827) は多くの論考のなかで、理想的な女性の姿を描き出している。例えば、小説『リーンハルトとゲルトルート (Lienhard und Gertrud)』に登場するゲルトルートは、賢明な妻であり、聡明な愛をもって教育する母親であり、村落の危機に際して助言と行為でもって奉仕する構成員である。彼女の影響力は、家庭を越えて広がり、隣家へ、さらに村落共同体へと及んでいく。学校教師や領主までもが彼女に学び、彼女を称えている。

女子の教育⁽¹⁾はどうあるべきか。いかなることがらに注意を向けて女子を陶冶すべきか。こうした関心は、ペスタロッチーにおいても、決して等閑に付されるもので

はなかった。将来母親となり、子どもの教育を担うであろう女子を教育することは、教育という営為そのものの革新へと繋がる。彼にとってそれは、人間教育の基礎を築き上げることに他ならなかった。現に彼は、イヴェルドンの学園に女子を対象とした教育施設を併設し、女子の教育を理論的のみならず実践的にも検証しようとしていたのである。

なるほど、ペスタロッチーの女子教育あるいは女子学校についての文献資料および先行研究は、きわめて少ないといえる⁽²⁾。しかし、「女性」「母親」を重視したペスタロッチーの教育思想の核心は、その女子教育論の内実にこそ求められるものではないだろうか。「ペスタロッチーの女子教育に関する考察」と題する一連の研究は、以下の二つの関心から導かれる問いに答えていくことによって、かかる課題に迫りたいと考える。

ひとつは、ペスタロッチーにおける「母性」の意味と

その陶冶のための方法論である。周知のとおり、彼は多くの著作のなかで、教育における母親の位置をとりわけ重視している。しかし、生物学的な母親という事実を無条件に賛美しているわけではない。子どもの教育において発揮されるべき機能として、「母性」が期待されているのである。

それでは、彼が期待する「母性」の機能とは何か、またその「母性」を発揮するための具体的な手立てとはいかなるものだろうか。本研究では、これらの問いに対し、ペスタロッチーの女子教育論とその実践を明らかにすることで答えていきたい。

もうひとつは、イヴェルドン女子学校の理論と実践の内実である。イヴェルドン女子学校は、女子の教育に対するペスタロッチーの理念を実現するものとして付設されたが、その指導権は学園の教師の一人であったクリュージー (Krüsi, Herman) に託された。さらにそれは、カストホーファー (Niderer-Kasthofer, Rozette) 女史へと委譲されることとなる。こうした経緯からすれば、ペスタロッチーの理念が実践へと展開されていった過程において、女子学校の教育にかかわる教師が、彼の理念や教育論をどのように受容し、具体的な教育活動へと反映させていったのかという問いが浮かび上がってくる。

さらに、女子学校の校長となったカストホーファーは、自らも女子教育に関する論考を著している。同性として、彼女がどのようにペスタロッチーの女子教育論を受け止めたのかという受容の在り様も興味深い。その在り様を通して、ペスタロッチーの女子教育論、ひいては彼の教育思想のなかに基礎づけ可能な原理を見出すこともできるのではないかと考える。

以上のような問題関心にもとづいて考察を進めていくにあたり、本稿はその端緒として、当時すでに存在していた女子に対する教育の機会について論議し、彼の教育論を時代の教育的思考に照らして評価していきたい。考察は、次のような手順で進める。まず、近代スイスにおける女子教育の理念や実践について概観し、その特徴を明らかにする。次に、ペスタロッチーの女子教育論および女子学校設立への経緯について整理する。カストホーファーとの出会いや女子教育についての彼女の見解などにも触れながら、女子学校の教育理念や実践指針を明らかにする。最後に、本稿の結びにかえて、ペスタロッチーの女子教育論および女子学校での実践の意義を評価し、今後の課題を示す。

II. 近代スイスにおける女子教育

啓蒙期から19世紀中頃までのスイスにおける教育思想と女子教育の理念を研究したヴァツニーヴスキ (Wazniewski, Marguerite) は、二つの異なる方向性を指示する思想潮流が、近代スイスの個々の時代を規定していたことに注目する。ひとつは合理性に方向づけられた啓蒙主義思想であり、もうひとつは家父長的な国家観に示される敬虔主義的な思想である。そして、当時の女子教育の理念やその実践にも、こうした風潮の影響が特徴的にあらわれていることを指摘する。つまり、合理性に方向づけられた要素が優勢となった時代には、教授による陶冶が女子教育の可能性を開き、非合理的要素が優勢であった時代には、宗教的感化による「内的生の更新 (eine Erneuerung vom Innenleben)」が期待されたのである。

近代スイスの女子教育の理念を特徴づけるために、ヴァツニーヴスキは、カトリック、プロテスタントそれぞれの諸邦 (Kanton; カントン) の女子教育の実際を報告している。以下、彼女の論考に依拠しながら、当時、女子に対して開かれていた教育の機会とその根底にあった女子教育の理念について概観したい。

1. ウルスラ修道会の女子教育

カトリックのカントンであるルツェルンでは、16世紀中頃には、少女の教育を家庭外の女性に委ねるというシステムが確立していた。それは一般に、聖ウルスラ修道会 (Congregation der Ursulinerinnen) に属する修道女に担われていた。

ウルスラ修道会の修道女の多くは、良家の子女であり、その職業倫理の高さ、信仰、良識ある生活態度は、少女たちの模範として高く評価されていた。また、修道女たちはその仕事に無報酬で取り組み、必要経費も自己負担でまかなっていた。そのため、修道会学校は国家や官庁から独立した無償の教育施設という性格を有することになった。こうした教育施設の非依存的な特性によって、修道会の教育では、おのずから規律が重視されることになっていった。なぜなら、学校の規律に反する少女を、遠慮なく親元へと送り返すことが可能であったからである。

模範的な女性としての教師、そして規律正しい学校という評価は、少女を保護する立場の両親を満足させるものであった。また、その評価は両親のみならず、少女たちにも共有され、修道会学校に入学することそれ自体がステータスとなっていたようである。

ウルスラ修道会は、反宗教改革の精神に基づくカトリックの教派であり、その教育理念および課題は、「少女をキリスト教徒らしい母親へと教育すること (Mädchen zu christlichen Müttern zu erziehen)」であった。中世からの伝統を有する女子修道院教育の理想は、本質的には、「家庭における女性の働き／その作用 (das Wirken der Frau in der Familie)」に注意を払うものではなかったといえる。それに対して、改革派は「再び絶対的な精神的・宗教的意義を家庭へと取り戻し」、「自然に付与されたものとしての家庭に女性をより強く結びつけた」(Wazniebski, S.7.) との見解を考慮するならば、母親教育においても「宗教的感化 (religiöse Einflußnahme)」が第一義とされている点に、修道会教育の特徴が指摘されよう。

2. プロテスタントの女子教育

カトリックのカントンであるルツェルンでは、1659年に男女両性の初等教育が実現され、すでに1674年には日曜学校 (die Sonntagsschule) において、女中や主婦といった女性たちにも読み・書きおよび宗教的教義が教授されていたようである。しかし、ヴァツニーヴスキによれば、プロテスタントのカントンの少女にとって、こうした機会に相応するものは見られなかった。

というのも、プロテスタントの女子教育への見解に特徴的であるのは、女性の陶冶の目的を彼女たちの「自然の使命 (natürlicher Beruf)」に求めている点にある。ここで言う「自然の使命」とは、端的には家政の領域を指す。その意味において、女子教育はかなり固定した要求のもとで出発していると言えよう。ルターは、共同体の宗教的責任の精神から女子教育の義務を演繹したが、それはただちに、学校設置を含む教育制度の革新へと繋がるものではなかったようである。むしろ彼は、修道院制度を廃止し、家庭に再び宗教的、精神的意義を取り戻そうとしたのである。

とはいえ、学習の機会が全く閉ざされていたわけではない。少年や少女を授業へと召喚する内容の看板 (Aushängeschild) から、少なくとも少女や女性にも、読み、書きの学習は可能であったことがうかがえる。しかしそれは、教育的な意図のない単なる習い事 (Lerngeschäft) の域をでなかったことも指摘されている。

16世紀になって、チューリヒの議会はいわゆるドイツ語学校 (die deutsche Schule) の開設に向けて動き始めた。そして1538年、4つの少年学校と2つの少女学校が開設

された。しかし、ヴァツニーヴスキによると、少女の場合、少年たちが支払わなければならない額の数倍の学費が必要であったことが報告されている。そのため、プロテスタントのカントンでは、女子教育における新たな方途や手段が模索されなければならなかったのである。

こうした試みを牽引した思想は、啓蒙の合理性に特徴づけられるものであった。それは、人間が内的に調和しうる存在であることを唱え、現実の道徳的秩序も、調和可能態としての人間の意志によって新たに構築されうるものと信じた。そのような思考にもとづいて、女性の役割の研究も進められていったのである。

ヴァツニーヴスキの論考では、スイスにおける啓蒙の思想家として、ボードマー (Bodmer, Johann Jakob) やズルツァー (Sulzer, Johann Georg) らの名前が挙げられているが、彼らはともにペスタロッチーへの影響が知られている人物である。なるほどペスタロッチーの女子教育論も例外なく、こうした流れに位置づくものと言えよう。しかし彼の思想は、それにもみ立脚するものではなく、むしろ多様な要素を含み込み、ときに啓蒙の合理性を超え出ている点も評価されている。

それでは、彼の女子教育論とはいかなるものであったのか。以下、その詳細を見ていきたい。

III. ペスタロッチーの女子教育論

ペスタロッチーの女子教育論とその実践は、どのように特徴づけられるのだろうか。その問いに答えるにあたって、まず、ペスタロッチーがここで教育の対象とされる女性の存在をどのように捉え、何を教育の目的として設定していたのかについて考察したい。

1. 女子教育論の前提

ペスタロッチーの教育学的思考の前景に、社会的契機が存することはよく知られている。たとえば貧民教育について、彼は共同体 (die Gemeinschaft) の責任を強く訴える。それは、共同体が貧民に「自助 (Selbsthelf)」が可能であることを学ばように求めることであり、その作用はいわゆる「自助の助 (Helf über Selbsthelf)」と特徴づけられるものである。

ペスタロッチーにおいて、こうした共同体の中心に家庭が位置づけられる。それはすなわち、概念としての「居間 (Wohnstube)」である。彼によれば、「居間」は、人間の「生活圏 (Lebenskreis)」が共同体へ、さらに国家へと同心円的に拡大していくための中心点である。それ

は、「居間」が人間社会の核であることを意味している。こうした「居間」を司る存在として、女性はその優れた社会的意義を際立たせられることとなるが、その具体相は、小説『リーンハルトとゲルトルート』のゲルトルートに顕著である。

ブオル (Buol, Conrad) は、小説に描き出されるゲルトルートを「ドイツ文学における真の妻の最も印象深い像」と評価している。そして、ゲルトルートに際出させられるところの力とはなにか、彼女は真の女性の本質を示しているのか、さらにペスタロッチャーの女子教育論は彼女を通してどのように描き出せるのかを問うている。

それによれば、ゲルトルートに際出させられる力は、生活上の「実際の諸能力 (praktischen Fähigkeiten)」として形容される。それは、家庭内の労作 (Arbeit) や子育て、つまり家庭が有する経済機能や養育機能を保ち続けるために必要な能力を意味し、「生活の魂 (Seele des Lebens)」とも言い換えられている。

しかしながら、ペスタロッチャーはまた、こうした能力の育成が女性の陶冶の一面でしかないと認めてもいた。女性が女性として気高くあるためには、彼女の素質や能力の調和的な発達、すなわち、彼女の心情を陶冶し、悟性を陶冶し、身体的能力を訓練することが求められなければならない。そのなかでとくに強調されているのが、心情の陶冶である。

a. 美しいものとのかわり

ゲルトルートの描写において注目されるのは、彼女の生活のなかに「美しいものとのかわり (Umgang mit dem Schönen)」が盛り込まれていることである。ブオルによれば、色、音、動きの調和は、人間の心に作用し、美しいものに対する純粋な喜びを目覚めさせ、人間の心を自由にする。こうして解き放たれた心は、善なるものや真なるものにもまた感じやすくなる。それゆえに「美しいものの体験と創造 (Erleben und Schaffen des Schönen)」は、心情陶冶において有意義となる。

ペスタロッチャーは、「美しいものの体験と創造」をゲルトルートの日常に描き出す。たとえば部屋を片付け、整えること、豊かな食事を供すること、衣服を清潔に整えることに始まり、子どもたちと賛美歌を歌い、美しい旋律に触れることのなかに示されるのである。

b. 道徳的・宗教的な力

ペスタロッチャーが女性に求めた実際的な能力は、さらに「道徳的・宗教的な力 (sittlich-religiöse Kraft)」によって強化される。

たとえば、ゲルトルートはいかなるときにも家族を救おうと気丈に努める。こうした彼女の姿を、ペスタロッチャーは、「愛 (Liebe)」と「思慮深さ (besonnen)」として形容し、その源泉が彼女の「敬虔さ (fromm)」にあることを強調する。ペスタロッチャーによれば、神と自らの内なる神的な力への信仰において、またその神的な力の表現である良心への従順においてのみ、人間は自己自身と一致し、純粋で賢明なる愛の力に導かれる。それゆえに彼は、信仰と従順に示されるような「道徳的・宗教的な力」に注目するのである。

「道徳的・宗教的な力」の陶冶の重要性は、女性にのみ限られたものではない。それは美的陶冶とともに、あらゆる人間教育の基礎とされる。しかしながら、「生活の魂」とも言える家政の領域のことがらが、このように陶冶された女性の手を通してなされるならば、女性の社会的意義はよりいっそう豊かな意味をもつこととなろう。ペスタロッチャーの構想する女子教育は、啓蒙や救済の地点にとどまるものではなく、むしろその教育的意義を積極的に見積もられていたと言える。

このような理解は、ペスタロッチャーの女子教育および女子学校教育理念において、どのように具体化されたのか。また、このような理解からどのような教育目的が演繹されたのか。以下、イヴェルドン女子学校教育理念に着目して考察したい。

2. イヴェルドン女子学校教育理念

ペスタロッチャーの女子学校は、1806年5月、イヴェルドンの少年寄宿施設 (Knabenspensionsanstalt)・少年学校 (Knabeninstitut) に付設された。この女子学校についてペスタロッチャーが書きあらわしたものとしては、「女子学校の根本的な諸特質 (Grundzüge der Töchteranstalt)」と「女子学校に関する付記 (Zusatz, das Töchterinstitut betreffend)」の二つの報告が挙げられる。ここではこの二つの報告を中心に、女子学校開設の意図および女子学校の教育目的を明らかにする。

a. 女子学校開設の意図

女子学校開設をめぐる、ペスタロッチャーは次のように述べている。

「私のメトーデの影響を広めることが、私のかねてからの目的であった。ミュンヘン・フーゼーの施設と当地 (イヴェルドン) の施設との統合は、この根本方針に立った学校を女子のために少しずつ開いていくという考えへと至らせた。また、私のメトーデによって当地の女

子の教育に対して、何かしら貢献したいというかねてからの希望を、いまや実行しようという考えへと至らせたのである」(PSW.Bd.18.S.137.)。

ここに明言されているように、ペスタロッチャーが示す女子学校開設の意図は、「本来の意味においての」メトーデの普及にあったと言える。ここで「本来の意味においての」としたのは、メトーデはもともと、母親のための教育術として構想されたものだったからである。しかし、それは世の母親一般が容易に活用できるものではなかった。したがって、メトーデをもって女子教育に貢献し、教育された女子を通してメトーデを普及する可能性が示されたことは、メトーデ本来の意義を実現することへと繋がるという点において、まさにペスタロッチャーの念願であったと言える。

また、先のペスタロッチャーの報告は、彼が女子学校に対し、メトーデによる人間教育にとどまらず、母親教育の機能を期待していたことを明らかにしている。このことは、彼の次のことばからも明らかである。

「私の教育の試みが始まる当初から、私が究極的に目指してきたものは、母親たちに、その子どもたちに対する彼女の自然の義務を果たすための多くの手段を与えること、さらに彼女の使命のために、あらゆる方面にわたって彼女の諸力を目覚まし、高めることである」(PSW.Bd.21.S.82.)。

b. 女子学校の教育目的

女子学校の教育目的は、こうした意図に基づいて設定されていると言える。「女子学校に関する付記」によれば、それは次の3点にまとめられる。

- (1) 基礎陶冶 (Elementarbildung) の基本原則に従い、少女たちに十分な教育を与えること。
- (2) 大人へと近づきつつある、また成長しつつある少女たちを、メトーデの精神において女性教師 (Lehrerinn) へと陶冶すること。
- (3) メトーデの端緒とその個々の部分との活用の仕方を知りたいと思う少女や母親たちに、ここで正しく教授すること。

これらの目的の明記に続いて、ペスタロッチャーは次のように述べている。

「この施設において、基礎陶冶は一般に人間陶冶の正しい基礎であるのみならず、女性の教育のためにとくに何が必要かを考える場合にも、十分に応えるものであるとわかった」(PSW.Bd.21.S.84.)。

学園がその実践において貫いてきた基礎陶冶の理念と

方法は、女子教育にも有効であるとみなされている。また「女子学校の根本的な特質」においても、「女性の教育にとって極めて緊急である」ことがらとして、「確実な頭の陶冶と力の陶冶 (solide Kopf- und Krafftbildung <Kraftbildung>)」に焦点を当てるべきことが述べられている (PSW.Bd.18.S.138.)。つまり、女子教育にあっても、認識と諸能力の調和的発達を目指す人間教育が第一義とされているのである。したがって、女子学校の具体的な教育課程は、少年学校の問題ならびに教授内容・方法を踏襲したものとなっている。

ここで留意したいのは、(2)である。女性教師の陶冶がうたわれている。このことに関連して、ペスタロッチャーは世の母親たちに対し、次のように呼びかけている。

「あなたたちの周りには貧しい同胞がいる。(中略)あなたたちの周りには愛すべき孤児たちがいる。(中略)もし少女たちを女性教師にすれば、彼女たちを通して、あなたたちはこうした子どもたちを救うことができるのだ」(PSW.Bd.21.S.83.)。

ここにおいてペスタロッチャーは、女性を教育することが家庭の養育機能の向上にとどまらず、貧民・孤児の救済へと繋がることを示唆している。それは、ひとつの社会貢献として位置づけられる。しかしここで注意したいのは、語義どおりの指導者養成が目論まれているわけではないということである。なるほど、メトーデの普及という意図を考慮すれば、女性教師の必要性はおのずと導かれよう。また、女子学校の運営のなかで、女性教師の需要が高まったとも考えられる。しかし、ペスタロッチャーは、「居間」を核とした影響力を女性の社会的意義として評価していた。女子学校の成果としても、こうした影響力を有する女性の育成が望まれていたと言える。その意味において、この目的は「母親への準備教育」として捉えるべきであろう。

したがって、女子学校の教育目的は、第一に少女たちへの人間教育の保障、第二にペスタロッチャーが理想として描き出す母親への準備教育、第三にメトーデの普及と換言することができる。

IV. カストホーファーについて

ペスタロッチャーの女子学校は、開設当初、彼の協力者の一人であるクリュージーの監督下にあった。しかし1809年、ペスタロッチャーは女子学校の校長としてロゼッテ・カストホーファーを推挙した。そして1813年には、女子学校を彼女の私有財産として委譲したのである。

ペスタロッチャーの女子教育に関わる理念や目的は、実質的には、カストホーファーに継承され、彼女によって展開されることになる。それゆえに、ペスタロッチャーの女子教育というテーマを掘り下げるためには、彼女の存在を無視することはできない。そこで以下、ペスタロッチャーとカストホーファーとの出会いについて簡潔に記すとともに、往復書簡や著書に見られる彼女の見解を比較の視点として、ペスタロッチャーの女子学校の教育理念についてさらに論じていきたい。

1. カストホーファーとの出会い

1779年に生まれた彼女は、女子学校の校長であることのほかに、ペスタロッチャーの協力者のひとりであるニーデラー（Niederer, Johannes）の妻として知られている。彼女は、アーラウに住む兄（Kasthofer, Gottlieb）のもとで暮らしていたが、ゴットリープはレンガー（Rengger, Albrecht）を通じてペスタロッチャーをよく知っていた。また、もう一人の兄弟であるフリードリヒ（Kasthofer, Friedrich）が、1799年、医師としてシュタンツの野戦病院を指導していたことも、彼女がペスタロッチャーへの関心をもつことに繋がったようである。

ペスタロッチャー学園がブルクドルフからミュンヘンブーフゼーへと移転されるに際して、彼女はペスタロッチャーを訪ねている。しかし、学園の運営はフェレンベルク（Fellenberg, Philipp Emanuel von）に委ねられており、ペスタロッチャーは不在であった。かわってムラルト（Muralt, Johannes von）が応対し、メトーデの個人授業を行った。ペスタロッチャーとの面会が果たせなかったとはいえ、このときの経験が、彼女には新鮮な刺激となったようである。

ペスタロッチャーが彼女に関心を寄せていく過程は、両者の間で交わされた書簡からいくらかうかがい知ることができる。彼女はペスタロッチャーのメトーデに対する理解と彼への信頼、愛着を示し、ペスタロッチャーは喜んで感謝の意を表明するとともに、彼女の理解や教育に対する信念に深く感動している。

日付は不明であるが、アーラウへと送付されたペスタロッチャーの書簡によると、彼女のメトーデに対する理解が見事であり、協力者として極めて魅力的な逸材であることが確信されている。

「友よ！私はあなたの助けが必要です。私の女子学校は、気高い見解を有する人がおらずには立ち行きません。メトーデを完成させたいというあなたの意思是、現時点

での私の欲求と完全に一致しています」（PB1.S.29.）。

1808年9月28日付の書簡では、イヴェルドンへの転居を間接的に要請している。ペスタロッチャーはすでに、彼女をDuで呼びかけている。

「友よ、君の参加は運命なのです。（中略）君がすでに持っているものに対し、君がメトーデに必ず与えるであろうものを付け加えるならば一君は最も成熟した人間になります。（中略）君は、自分の環境や境遇を見つめたとき、私たちが互いに近く住まうようになるということを引きと選ぶことでしょう」（PB1.S.29.）。

こうしたペスタロッチャーの求めに応じて、彼女はグラッソンに赴き、すぐにイヴェルドンを訪れた。しかし、彼女はしばらく、ペスタロッチャーの活動や女子学校に日常的には加わず、距離をおいて観察したのである。

二人の関係はすでに、「お父さま（mein Vater）」、「わが娘（meine Tochter）」と呼び合うほどになっていた。彼女は、自己自身が満たされる場をイヴェルドンに見出し、ペスタロッチャーもまた、理想に向かって進むための同志を得たのである。こうした彼女は、1808年の暮れ、女子学校の経営を承諾し、ペスタロッチャーの計画に参加することとなったのである。

2. カストホーファーに見る女子教育についての見解

ペスタロッチャーの要請を受けて女子学校の経営者となったカストホーファーであるが、1808年9月22日付のペスタロッチャーに宛てた書簡では、彼の要請に対して驚き、ためらうかのような心情を読み取ることもできる。

「私は、女性の力による助けが求められているとは思いませんでした。それは全く不必要であると思っていたのです」（PB2.S.44.）。

彼女のこうした心情は、学校教育における女性の位置を指摘している。彼女はペスタロッチャーの思想や理念について、独自に学んでいた。女性に対する彼の理解に関しても感受していたに違いない。

先にも述べたように、彼は「居間」という場に結びついた形で女性の力を評価していた。たとえば、小説『リーンハルトとゲルトルート』の学校教育の場面では、「ゲルトルートの居間」を模倣すべきことが目指される。

しかし、学校教師がゲルトルートの居間を訪ねることはあっても、ゲルトルートを女性教師として任用し、学校教育を委ねるという展開は見られない。小説の第三版においても、学校教育における女性（ゲルトルート）の役割は、家政を通して指導するものにとどまっていた。

それゆえに、学校の教授や経営に「女性の力による助け」が求められていることは、少なからず革新的なものとして受け止められたのかもしれない。

しかし、彼女はその著書『女子教育の本質についての考察 (Blick in das Wesen der weiblichen Erziehung, 1828)』のなかで、女子教育を担う者としての責務と誇り、さらに「女性の力による助け」の必要性を次のように表明するようになる。

「私は、人類の発展の歩みにおける女性の本性およびその位置という課題について、(中略)教師であり、校長であるという義務を十分に遂行しうることを目的に、書き記します」(Kasthofer,S.4.)。

「今日まで、男性のみが女性の教育を行ってきました。たとえ実践しなかったとしても、規定してきました。厳密に言うならば、それはつまり、私たち女性は、男性の価値や規定のもとで発展しないまま留まっていたのです」(Kasthofer,S.10.)。

なるほど、彼女は次のような文脈で、母親教育をひとつの柱とするペスタロッチーの教育理念を継承している。「どのような母親もすでに根源的に、(中略)その愛は子どもの生活を包括するすべてです。彼女の存在や行為は、あらゆる教育の根源的なモデルなのです。しかしそれは、いまだ未発達な子どもにとって完成したものです。(中略)子どものさらなる発展のためには、母親自身が発展を遂げていなければなりません」(Kasthofer,S.7.)。

しかし、知的陶冶への積極性という点において、彼女の見解はペスタロッチーと趣を異にしている。彼女の理解によれば、これまで「学問的な教授の光 (das Licht wissenschaftlichen Unterrichts)」は、女性の精神の弱さのゆえに、「女性を女性の領域から引き離し、無価値の中間物へとならしめるもの」(Kasthofer,S.9.)として遠ざけられていた。しかし、生活上の調和にこそ両性の幸福があるならば、陶冶においても調和が、すなわち「共通の度合いでの一致」が求められるべきである。「女性は家庭的かつ道徳的にのみならず、教育的かつ精神的に、自らの正しい地位を占め、実現することができるように」、「時代の必要とともに前進し」(Kasthofer,S.10.)なければならないのである。

彼女は、読者に向けて「私たち (wir)」あるいは「私たち<女>性 (unser Geschlecht)」と呼びかける。自らをも対象として論じる彼女のまなざしは、ペスタロッチーの女子教育論を批判的に再構成するとともに、創造的に展開していこうとする。そこには、ペスタロッチー受容

の断片が見出されうるとともに、思想的、時代的制約のなかで女子教育の機会がいかに開かれうるかという可能性や展望もまた、読み取ることができるだろう。彼女の見解についての詳細は、稿を改めて論ずる。

V. 結びにかえて～まとめと今後の課題～

本稿は、近代スイスにおいて開かれていた女子教育の機会を明らかにするとともに、そこから導かれる教育学的思考に照らしてペスタロッチーの女子教育論を特徴づけることを主眼とし、考察を進めてきた。

近代スイスの時代精神を規定していたのは、啓蒙主義と敬虔主義の二つの思想潮流である。それらは、当時の教育学的思考にも大きな影響を与え、女子教育の機会もまた例外ではなかった。

ペスタロッチーの教育思想の基盤に啓蒙の合理主義が存することはすでに知られていることである。女子学校の設立も、啓蒙主義者たちが推し進めていた教育改革の流れに位置づくものと見なすこともできよう。しかし、彼の女子教育論は、文教政策の域に留まるものではない。家庭に人間教育の原点を求め、そこに女性の社会的意義を見出した彼は、その意義を積極的に評価した。そして、教育改革、ひいては人間改革の具体的な方策として、「母親への準備教育」を柱とする女子教育を構想したのである。それは、「メトーデの普及」というかねてからの期待と相俟って、女子学校の教育目的に具現する。

ペスタロッチーの女子教育論は、「母親」という女性の一側面を捉え、そこに終始するという点において、むしろ女性の生き方を制約し、自立を妨げているように受け止められるかもしれない。また、子どもの教育という領域に対し、女性に過大な要求をしていると感じられるかもしれない。しかし、人間教育に自然と与しうる存在として「母親」があること、子どもにとって「母性」という機能が必要であること、そしてその機能が最大限に発揮されることにより教育が変わる、人間が変わる可能性があることは、今日においても否定されうるものではないだろう。彼の女子教育論が極端なものを含んでいたら、それは当時の女性が置かれていた時代の状況に拠るところが大きい。すなわち、すでに開かれていた教育機会の乏しさなどからもわかるように、彼女たちへの社会的評価は決して高いものとは言えなかったのである。その意味において、女性のもつ可能性、社会的・普遍的意義に注目した彼の功績は、当時のスイスにおいても大きかったと言えよう。

本稿は、ペスタロッターの女子教育に関する考察の端緒として、研究の軸となる課題についても概説的に触れた。ペスタロッターにとっての「母性」とは何か。「母性」を陶冶するための教育とはいかなるものか。また、「母性」を陶冶するための教育は女子学校において実現しえたのか。次稿で考察を深めたい。

VI. 注

(1) 女子を対象とした教育をあらわすものとして、ペスタロッターの論稿およびペスタロッターに関する先行研究では、*Frauenbildung* / *Mädchenbildung* / *weibliche Erziehung* oder *Bildung* などの表現が用いられている。

また、女子学校については、*Töchterinstitut* あるいは *Töchteranstalt* の表現がある。

これらの用語の差異において、明確な意味上の区分がなされていないことから、本稿ではすべて「女子教育」「女子学校」と訳出した。

(2) ペスタロッターの女子教育ないし女子学校を主たるテーマに取り扱った先行研究は、管見では以下のとおりである。これらの文献は、チューリヒのペスタロッター・アムムにおいて、*Frauenbildung* の項目で分類され、所蔵されていたものである。

Natorp, P. (1905) : *Pestalozzi und die Frauenbildung*. Lpz. / Buol, C. (1952) : *Mädchenbildung im Geiste Pestalozzis*. ; In *Bündner Schulblatt*, Chur. / Wazniewski, M. (1944) : *Theorien zur*

Frauenbildung im pädagogischen Denken der Schweiz vom der Aufklärung bis Mitte des 19. Jahrhunderts. Dietikon.

VII. 参考文献

Buol, C. (1952) : *Mädchenbildung im Geiste Pestalozzis*. Vortrag, gehalten am 4. Oktober 1952 in Chur und am 25. Oktober 1952 in Zürich. ; In *Bündner Schulblatt*, Chur 1952, 12. Jahrg. Nr. 2.

Niederer-Kasthofer, R. (1828) : *Blick in das Wesen der weiblichen Erziehung. Fürgebildete Mütter und Töchter*. Berlin.

Pestalozzi, J. H. (1924ff) : *Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe*, hrsg. von Buchenau, A., Spranger, E. und Stettbacher, H. Bd. 18. und Bd. 21. Berlin. (PSW と略す)

Pestalozzi-Blätter (1884) .

1 : 'Briefwechsel zwischen P. und Rosette Kasthofer aus dem J. 1808.' (PB 1 と略す)

2 : 'Briefwechsel von Pestalozzi und R. Niederer aus dem Jahre 1808.' (PB 2 と略す)

Stadler, P. (1993) *Pestalozzi. Geschichtliche Biographie* Band 2. Zürich.

Wazniewski, M. (1944) : *Theorien zur Frauenbildung im pädagogischen Denken der Schweiz vom der Aufklärung bis Mitte des 19. Jahrhunderts*. Dietikon.

Widmer, C. (1973) : *Pestalozzis Burgdorfer Zeit 1799-1804. Die Geburtsstunde unserer Volksschule*. Bern.